

## 1978年度秋季研究発表会

標記の発表会は、10月20日(金)、21日(土)の両日、青山学院大学渋谷キャンパスにおいて行なわれました。この大会は、鈴木栄一氏を委員長とする実行委員会によって準備されました。以下は、実行委員および大会参加者による報告です。

### 裏方のORが不足？

**概括** 今回の特別テーマは「地域・環境の問題とOR」で、この件について6件の研究発表があり、また特別講演が2つありました。

一般発表は計95件、ペーパー・フェア発表が15件で合計110件の研究発表があり、また出席者は計314名にのぼり、発表数、出席者数ともに予想を上まわる久々の盛会でありました。またこの秋期大会に日程を合せて、前日の19日(木)には「予想と予知」と題してシンポジウムが開かれ、そのほか理事会、支部長会議なども会期中にもたれました。発表会終了後の21日夜には、青学会館にて「地域・環境の問題とOR」と題して第18回ORサロンが開かれ、参加希望者が集い、インフォーマルな雰囲気の中で、掘り下げた意見の交換が行なわれました。

**特別講演**は、20日に、明治大学島田俊郎教授の「第8回国際OR会議報告」と国立公害研究所近藤次郎所長の「環境問題に対するOR的アプローチ」がありました。前者の講演は、ORの分野における国際的な動向に触れるよい機会であったと思います。とくに中国の研究動向は興味深いものでした。近藤氏の講演では、わが国の国力を結集したこの研究所でいまだんな研究に取り組んでいるか、また研究所の組織や予算なども紹介され、私などは、まずその規模に驚かされるおもいでした。21日には、関東学院大学安芸校一教授により「水資源開発に考える」と題する特別講演がありました。国連における氏の永年の経験から、地域の産業形態や社会形態、またそれらの計画が、その地域でどんな水の利用の仕方ができるかに大きく依存せざるを得ないことが、具体例とともに説明されました。

**一般発表**の95件は5つの会場にわかれて行なわれましたが、件数の多かったセッションからいうと「数理計画」(19件)、「信頼性」(16件)、「待ち行列」(10件)、「動的計画」(10件)などの理論・手法的なものがあり、また

応用関連としては「特別テーマ」(6件)、「経営」(4件)、「シミュレーション」(3件)などがありました。

自由討論会は、司馬正次氏の司会のもとに、企業におけるORや今後ORワーカーとして取り組むべき問題や手法などが議論され、アンケートがとられました。司馬氏のIFORS CANADA '78 に出席しての印象から、ORがいまや「曲り角」にきていること、「Identity が失われつつある」こと、しかし「グローバルな諸問題への挑戦」はいままでも増して精力的になされつつあることなどが指摘され、問題提起がなされました。

ペーパー・フェアは、時間的に、21日土曜の午後3時20分からということもあり、当初から多くの参加者を望めないと思っていました。しかし各セッションとも、興味・関心のある小人数が集まり、時間をかけて心ゆくまで議論したり、タバコをくゆらせながら談笑している雰囲気、実行委員としては大きな満足を感じました。

**懇親会**は、過去の東京での大会は参加者が少なく35名~40名集まるのがやっとであるということを知っていましたので、40名で青学会館で予約しておりました。しかしフタを開けてみると53、4名が集まる 盛会となり、大変あわてました。したがって、食物の量も質も不十分なものであったことは、私たちとしては一番心残りとなりました。こういうことをうまく予測し、計画できる方法は、ORにはないのでしょうか。次回青学で研究発表会をするのはいつになるかわかりませんが、そのときの懇親会はもっと盛大にやりたいと考えております。

(実行委員 高森 寛)

### 第1日目レポート——華やかさの中の緊張

10月20日。昨夜からの雨も早朝にはあがり、日ざしこそないが暖かく、まずまずの天気で迎えた大会初日である。青山学院の正門へくると、十数名の女子学生が、ハイキングへゆくのであろう、それらしき荷物をかかえたむろしている。正門をくぐり抜け、会場へ入る。

まず、自分が関係しているA会場（ネットワーク問題のセッション）へゆく。ここでは3件の発表があった。最初は、業務フローにおける作業時間の同定という離散システムのパラメタ同定の問題が提起され、同定手法が提案されていた。あとの2件は、容量条件つきネットワーク中の最大フローのうちで、ある基準のもとでネットワーク中の各枝の流量が望ましい分布になるものを見出すという同じ観点からの問題設定であり、二つの発表の相互の関連から活発な質疑応答があった。

さて、つぎは、島田俊郎先生（明大）による特別講演「第8回国際OR会議報告」を聞くために別棟の講演会場へ向かう。花壇のある中庭では5、6人のパトントワラがパトンの練習をしていて華やいだ雰囲気である。特別講演は、200名近くの方々で東郷青児の大作が据えられた会場へ集まり盛況であった。しかし、IFORSについてはすでに学会誌10月号に報告済みということもあって、その内容が新鮮味に欠けたのは否めない。が、中国の最近のOR活動の状況についての部分は面白く、印象に残った。

昼食後、午前と同じ会場で、近藤次郎先生（国立公害研究所）による特別講演「環境問題に対するORのアプローチ」があった。講演開始直前、近藤先生の顔見知りの某氏が居眠りしているのを先生がわざわざその席までいって起こされるというハプニングがあったりして会場の緊張が和らいだ。講演は前刷りとは独立に進められ、その内容は公害研のプロフィルというものであった。

引続き、同会場で「企業におけるOR活動」という自由討論の場もたれた。そこでは、学会活動に対するいくつかの新しい提案が出されていたが、話題提供者の現状を憂えての意気込みが先走りした感があって、話題提供者の話に大部分の時間が費やされ、実質的な自由討論の場とならなかったのは残念であった。

午後のセッションは、ナップザック問題に関連するD会場へ入る。ここでは、セットバック問題がナップザック問題に帰着されるための新たな必要十分条件を与えた茂木先生（京大）の発表を興味深く聞いた。

（藤重 悟）

### 難解な理論展開より事例の紹介を

春季、秋季の研究発表会は筆者の楽しみとするものがあります。それは、発表者諸氏の研究成果をうかがうという意義の外に、このような学究的雰囲気を楽しむことに絶大な意義を感じるからであります。申し遅れまし

たが、筆者は電機会社に勤務する者であり、研究会などの機会を除けば大学の門をくぐることは、きわめて稀なことなのであります。したがって研究会会場に入るまでに、石の階段を登り、冷え冷えとした廊下を通り、講義室の椅子に座るまでの過程ははなはだ感激的なできごとなのであります。

こんな中途半端な気持では発表者に失礼とは思いますが諸氏の御熱演をうかがいました。

発表内容については筆者の不勉強のためか、あるいは久々の学究的雰囲気によって圧倒されたためか、よく理解できないままプロジェクターの映像を、あれよ、あれよ、と追いかけているうちに、気がついた時は、講演が終ってしまいました。

このような不真面目な感覚で、御講演の印象を語ることははなはだ失礼であると思いますが、御発表に際して凡人の要望をつぎのようにまとめてみました。

御講演の全体について感じられることですが、発表テーマの適用分野、適用した事例の紹介が少ないように思います。また適当な事例をもち合せでない場合にも、発表者が仮想している、モデルというか、例示の問題等の紹介があれば筆者らにも多少なりとも理解できたのではないか、と思います。

たとえば「生産現場ではどのようなOR手法が使用されているか？」と考えますと、答に“はた”と困ってしまうのです。それはOR手法をそのまま実務に適用することはあまりないからです。しかしOR手法というより、OR的考え方はその形を変えて非常に多く使われていると思います。OR的問題解決過程はOR手法があって、その適用し得る問題を捜すのではなく、ある解決すべき問題に適当な（当然とも遠からず的な仮想から）、問題解決型のアイデアを導入するのであります。このアイデアには、OR的手法、OR的考え方が有効であると思います。その意味から筆者らは、解決すべきテーマ等をもち、学会発表会等で新しい手法・考え方を求めているのであります。したがってこのような凡人には、難解な理論展開より（実際にはこれが一番重要なことは十分承知しているのであります）、仮想上の問題であれ、適用されるべきモデルの紹介を熱望するものであります。

以上、なにか印象記というより筆者の不勉強を吐露したようであります。筆者は次回の研究発表会において学究的雰囲気を楽しむことを楽しみに筆を擱きます。

（井出俊之）